

調査研究終了報告書

研究分野：保健

調査研究名	鶏肉のサルモネラ汚染状況を改善するための基礎的研究
研究者名（所属） ※ 0印：研究代表者	○村上光一、中村祥子、江藤良樹、濱崎光宏、竹中重幸、堀川和美（福岡県保健環境研究所）、野田多美枝（保健衛生課）
本庁関係部・課	保健医療介護部 保健衛生課
調査研究期間	平成 17年度 - 20年度（4年間）
調査研究種目	1. <input checked="" type="checkbox"/> 行政研究 <input type="checkbox"/> 課題研究 <input type="checkbox"/> 共同研究（共同機関名：） <input type="checkbox"/> 受託研究（委託機関名：） 2. <input checked="" type="checkbox"/> 基礎研究 <input type="checkbox"/> 応用研究 <input type="checkbox"/> 開発研究 3. <input type="checkbox"/> 重点研究 <input type="checkbox"/> 推奨研究 <input type="checkbox"/> ISO推進研究
ふくおか新世紀計画 第3次実施計画	柱：いきいきと暮らせる安全・安心な社会づくり 大項目：健やかに暮らせる社会づくり 小項目：食の安全・安心の確保
福岡県環境総合基本計画 (P20、21) ※環境関係のみ	柱： テーマ：
キーワード	①サルモネラ ②鶏肉 ③食品衛生 ④生態 ⑤血清型インファンティス
研究の概要	
<p>1) 調査研究の目的及び必要性 県域で平成15年度に発生した食中毒のうち、約17% がサルモネラによる食中毒であり、また、県域を中心とする食品業従事者を調査したところ、331,644名のうち106名 (0.032%) がサルモネラを保菌していた。このように、サルモネラによる食中毒の発生、あるいは、サルモネラの感染の広がりには深刻で、看過できない。サルモネラによる食中毒の原因食品のひとつであると考えられる市販鶏肉は高率にサルモネラに汚染されている。ゆえに、食中毒予防の観点から鶏肉のサルモネラ汚染率を減少させる必要がある。本研究ではそのための対策を考える上で基礎的なデータを発信することを目的とする。</p>	
<p>2) 調査研究の概要 ①鶏肉のサルモネラ汚染実態を調査し、②鶏肉が血清型インファンティスのヒトへの感染媒体であることの証明を試みた。さらに、③血清型インファンティスの遺伝子型の特性を明らかにすること、④主要な遺伝型の血清型インファンティスの株が鶏肉中で多く生き残ることを証明しようとした。</p>	
<p>3) 調査研究の達成度及び得られた成果（できるだけ数値化してください。） ●食品業従事者のサルモネラ保菌率は、0.032%（106 / 331,644）で、中でも血清型インファンティスが多いこと ●市販鶏肉のサルモネラ汚染率は約4割で血清型インファンティスが多いこと ●血清型インファンティスが鶏肉を介してヒトに感染すること ●それらの血清型インファンティスは、非常に均一な、クローン性の高い集団で、一律の対策で一律の効果が期待されることが判明した。達成率は80%程度で、成果は英文論文4報（投稿中を含む）などである。</p>	
<p>4) 県民の健康の保持又は環境の保全への貢献 一連の研究にて ○食品業従事者に対して、サルモネラ保菌の危険性、鶏肉の潜在的な危険性を知らしめる基礎的な資料ができた。○消費者教育の基礎的な資料ができた。○農政サイドへ対策を依頼する場合の科学的な資料が整った。食中毒事例におけるサルモネラ保菌者の解釈が容易となった（実際に他県で本研究成果が資料として用いられた）。</p>	
<p>5) 調査研究結果の独創性、新規性 サルモネラ血清型インファンティスの汚染実態、ヒトへの感染経路等での研究分野では、当所の研究が、国内外で先行している。特に、Multilocus sequence typing 法などを用いた分子疫学的手法による血清型インファンティスの解析は、新規性にあふれている。</p>	
<p>6) 成果の活用状況（技術移転・活用の可能性） 技術移転は 保健福祉環境事務所、食肉衛生検査所職員を対象とした研修で積極的に行っている。 活用は、文献的資料として、食品安全委員会、WHOあるいはFAOにて活用される可能性が高い（過去の研究にて実績あり）。</p>	